

● シリーズ 私の見た日本 Vol.215

日本的な伝統建築から見た現代性

方建豪 (ハウ ケンゴウ)

中国浙江省生まれ。2020年紹興文理学院建築学科卒業。同年京都府立大学環境デザイン学科研究生入学、2022年研究生終了。現在、京都府立大学大学院生命環境科学研究科博士前期課程松田法子研究室に在籍し、テクトニックの視界から保存前提の歴史的建築の商業的再利用の研究を行っている



2020年の年末に初めて日本に来て以来、今日までずっと京都で暮らしている。私がそれまで過ごしてきた「江南水郷」には白い壁と黒い瓦の住宅が多く、それらに見慣れてきたためか、京都の建物にもどこか似たような奥ゆかしさを感じ、京都での生活にすぐに馴染むことができた。初めて京都の建物を見た時でも、大きく驚かなかったほどである。しかし、ここで生活する時間が長くなるにつれて、街を歩いていると足が止まることが増えた。その頃から徐々に京都の建築、ひいては日本建築の魅力を感じるようになったのかもしれない。

日本の伝統的な建築は材料として天然の素材を採用することが多く、できるだけ人工的な彫刻の痕跡を減らし、まるで「ヌーディーメイク」のように自然と素朴さに回帰する。それらの多くは簡潔な線、高品質な材料および優れた技術によって、ある独特の雰囲気を出している。簡潔ななかに芸術的な品位と落ち着きがあり、実用的で細部にまで美しさが宿っている。荒石を踏み石にし、丸竹を窓の棧にし、ざらざらした葦を簾にする。材料の本質や元の色を重視し、素朴さを尊ぶ。このような日本の伝統的建築と世界の現代建築は、建築と環境の調和や統一に関心をもち、また自然環境との共生にも関心をもち、

ニズム建築の先駆者のひとりであるアドルフ・ロースが提唱した現代建築理論の本質的な部分は、日本の一般の伝統的建築にも通じる点がある。

明治維新後、百年以上の探索と努力を経て、日本の伝統建築の現代化はついに驚くべき成果を収めたと言える。プリツカー賞受賞建築家を多数輩出するなど、日本の現代建築の成功には多くの内在的な原因があるが、そのひとつとして日本の伝統建築がもつ設計手法、空間の質、設計理念と、現代建築がもつ設計手法、空間の質、設計理念がある程度共通性をもっていることが挙げられると思う。つまり、日本の伝統建築が現代性をもっているとは私は考える。

2021～22年に、研究室の調査に同行して紀伊半島の漁村へ行ったとき、漁村の古い民家からは次のようなことを感じた。

日本の伝統的な住宅は、大きなひとつの広い空間を紙と木で柔軟に区分しているのだ。空間は必要に応じて臨機応変に分けることができ、障子は荷重を受けずに移動させることができる。障子を通して差し込む光は、量の明るい表面に反射して、さわやかで心地良い雰囲気を漂わせ、全体的に静かで調和がとれているように感じられた。また、障子や襖は

各部屋の境界になっていると同時に、各空間の間の流れを融通する媒体でもある。障子や襖を取り外せば、互いに分割された小空間をひとつの大きな空間に統合することができる。

2021年には京都中山間地域の林業集落である中川において、北山杉林業で形成された「庇下空間」を調査した。ここで「庇下空間」と定義したのは、丸太のまま数寄屋などに用いられる北山杉の表皮を剥いたり洗ったりする作業のための深い庇をもつ半屋外空間であり、さらにかつては天日干しで乾燥させていた丸太の置き場などとして使われていた場所だからである。調査中には、そうした行為が行われる場所でありながらも庇すらない空間、いわば庇のない庇下空間とも呼ぶべき場所を発見した。その空間は壁による包囲を一切追求していない。ある目的のために必要な最低限の空間装置によって構成され、空間は極限まで凝縮されている。

日本の伝統的建築もまた、壁による庇護と囲う役割は弱いのではないかと考える。そもそも建築と人の関係は、庇護し／庇護され、受け入れ／受け入れられ、同時に、包囲し／包囲され、制限し／制限される関係でもある。ここでは、安心感や帰属感を求めると同時に、包囲を突破し、束縛から抜け出すという考え

がある。このような原生的な矛盾は、建築史全体を貫いている。日本建築は主に壁を取り除くことで、この原生的な矛盾を解決してきたのではないかと考える。日本の伝統的建築では住宅、寺社を問わず、窓は多くて壁は少ないことが普遍的である。さらに、屋根の下に柱しか残っていないこともある。もしかしたら、日本の伝統的建築には最初から壁の概念がなかったのかもしれないとさえ考えてしまう。

日本の伝統的な建物は、四隅の柱さえあれば、屋根を支える壁さえ必要としない。これは1753年の『建築試論』でマルク＝アントワーン・ロージエが描いた「原始的小屋」と同じように、柱・梁のフレームの上に屋根を掛けることは建築の根源的な姿であった。主に石、煉瓦の壁で荷重を支えるヨーロッパ建築と違い、壁に穴を開けることに関して制限が少なく、開放部分が多い。洞窟を模倣したヨーロッパ建築では、荷重を支える役割と囲う役割の両者が壁に与えられている。日本の場合は、そもそも壁には荷重を支えるという役割がないため、構造壁が必要ではなく、「壁」に対する意識が生まれにくい。

それと同時に、日本の伝統的な住宅は内部／外部の間の流れと透過性を非常に重視している。部屋の片側の障子を完全に開けると、

屋外庭園の景色が室内に引き込まれ、室内空間もさらに延びてゆき屋外空間と一体化することができる。日本の伝統的な住宅における仕切りは非常に柔軟で、流動感があり、同時にファジー性も生じている。これらの特性は、現代建築の代表であるパルセロナ・パビリオンやファンズワース邸などの空間的特徴と類似しており、両者は空間のもつ意味と表現形式において一致点がある。

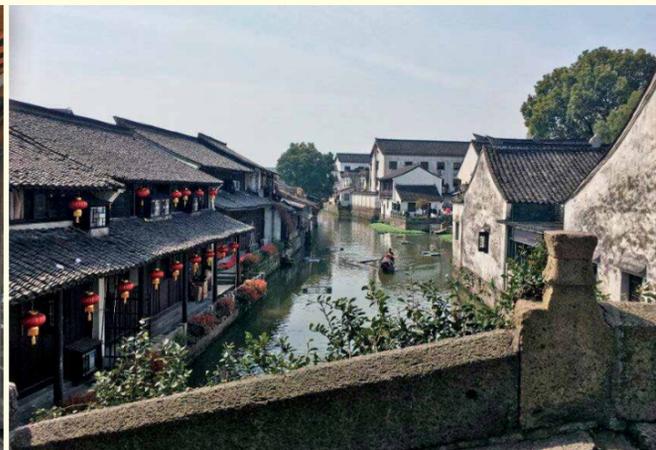
一方、こうした日本の建築に対する私の視点は、私の先入観に影響されたものではないかとも考えるようになった。そこで、2022年3月には、京都を起点として日本の近代建築を時間順に考察し始めた。そのなかで感じたのは、日本近代建築史の発展の線形性が強く、建築スタイルが唐突に分かれたり変化するような現象は現れていないのではないかと考えた。現代日本の建築家が現代の科学技術を用いて、日本の伝統建築の遺伝子を継承してきたために、現代建築物には日本文化の伝統的精神が溶け込んでいるのかもしれない。馬頭広重美術館、国際教養大学中嶋記念図書館などのように、現代の技術条件を利用して伝統的な木造技術と理念を融合させ、建築を再創造している。一代一代の建築家を通じて日本の建築的伝統が理

解され、咀嚼され、継承されるなかで、現代建築の質に影響を与えた。日本の伝統的な建築様式である「寝殿造」は、ある種の日常生活の場であった。そこで見られる連続(流動)的空間は、まさに繊細な木造システムに基づいて形成されていたが、それは現代建築にも継承されている。つまり、現代建築の原型には、日常生活の場があったのではないかと考えられる。

伝統と現代は昔から理解しにくい結び目だった。今、技術の発展によって生活が激変した時代に私たちは立っている。世界は一体化すると同時に、差異もますます現れ、「現代的」で「日本的」な建築の探索は特に重要と考える。「現代性」は大きな話題で意味が豊富であり、内容が複雑かつ広範囲にわたっているため、一言では言いにくい。本稿では、私の視覚と感覚から日本の伝統的建造物に接近し、現代建築の中に見られる日本建築からの影響、日本の伝統的建築の現代的な表現方法などについて考えた。日本の伝統的な建築と現代性との関係について全面的または系統的な論述をするのは少し難しいが、この問題を考える方法が検討され、構成の観点から日本の建築の問題がより具体的に分析・考察されることを期待している。



江南水郷のまちなみ



江南水郷のまちなみ



上・下／紀伊半島調査 障子の利用



京都中川 庇下空間



京都北観音山調査 障子